倉橋賞を受けて

戸波和子

幼稚園生活をしているうちに、いつの間にか十五年という月日は流れていった。

毎年行なわれている幼稚園教師研究会、日本保育学会で、多くの人は幼児のために、真剣に研究を続けておられる。また大学の先生方は、現場の先生がもっと幼児の記録を、いや実際の姿をつかむことができたら、どんなにすばらしい研究ができるだろうと、口ぐせのように私の耳もとで語られてきた。しかし、どうでしょう。現場の私たちの生活は、毎日、八時三十分〜午後二時まで、幼児と共にあり、ああこれが、このことをと、次々と新しい研究の材料をなげかけてくれるにもかかわらず、午後の教師の仕事は、お部屋の掃除、お金の集計、雑々と仕事が山のようにつみ重ねられている。あっという間に時間は過ぎ、明日の準備もろくにできない現実ではありませんか。

ちょうど昨年の秋、広島県の公開保育研究会の責任を与えられ、今、何を私はやらねば、何を知らねばならないか、と考えた。〝遊びの中の教育〟が叫ばれている今日、一体幼児はどんなにして遊び、また遊びによる成長は、教師が幼児の遊びをどれだけ理解しているか等……。

やおら私どもがテーマを定め、幼児の体格、体力、運動能力を基礎資料として幼児の体育的遊びの研究という計画を立てた時に、広島市内の幼稚園が一緒にしましょうと協力の声をかけて下さったことは、私共の大きな力となった。しかし現場だけの集まりでは、満足に深い研究はできなかったでしょう。そこに、広島女学院大学研究科の助教授が、「私も仲間として」と参加して下さった。調査の時期は折悪しく、一番忙しい卒業期に直面した。実測が終わって集計の段階になると、次々と指導を受けなくてはならない問題が出てきた。統計学、教育学、心理学と、それぞれの専門の助教授がしばしば、助言して下さった。「もう少し時間があればねえ」と言いつつ夜にかけて頑張り通して、遂に学会論文はできあがった。

広島市内の七つの幼稚園の園長並びに若い先生方が、一人一人実測調査のためおしまぬ協力をして下さったこと、また大学の先生方が現場に立って指導して下さったことなどのおかげで、学会報告はやっと研究路線に乗ったと言えるでしょう。

このたび思いがけず、私どもの発表が倉橋賞を受けたということは、感激の前に多くの人の熱意と協力の賜ものと感謝し、決して一人ではできない幼児教育ということを、強く強く考えさせられています。